

高校教員は新傾向の国語記述式問題をどう捉えているか

——全国調査から——

宮本 友弘, 倉元 直樹, 庄司 強 (東北大学)

本研究では、共通試験一般に求められる7つの要件(南風原, 2017)のうち、「メッセージ(何に向けて努力すればよいのか)の明確さ」の観点から、新傾向の国語記述式問題(イメージ例, モデル問題例)に対する高校教員の認識を探った。全国の高校2,000校を対象にした調査結果によれば、新傾向の記述式は、マーク式及び旧来の記述式と比べて目新しい印象を与えたが、試験問題としての価値や品位の印象に変わりはない。また、新傾向の記述式の解答に必要なと判定された資質・能力は、マーク式及び旧来の記述式とは異なる一方で、新傾向の記述式のねらいと整合した。以上から、新傾向の記述式問題は、高校教員に肯定的に受け止められ、メッセージは一定程度伝わっていることが示唆された。

キーワード：大学入学共通テスト, 国語記述式問題, 高校教員, SD法, 資質・能力

1 問題

令和3年度大学入学者選抜から実施される「大学入学共通テスト」(以下、新共通テスト)では、国語において記述式問題を出題することが企図されてきた。そのねらいは、複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる能力やその過程や結果を表現する能力を適切に評価することにある(高大接続システム改革会議, 2016)。背景には、大学入試センター試験はマークシート式であること、また、個別学力試験はたとえ記述式を実施していたとしても、こうした能力を十分に評価していないとする批判がある。

これまで、上記した能力を適切に評価するための記述式問題のプロトタイプとして、「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」のイメージ例(2015年)、「大学入学共通テスト(仮称)」記述式問題のモデル問題例(2017年)が公表されてきた。それらにおいては、題材として従来の評論や小説だけでなく、日常生活でみかける文章、会話文、図表等が使用され、また、設問では他者の考えを推論させたり、比較させたりする等、作問の工夫が重ねられている(宮本ほか, 2019)。

こうした新傾向の記述式問題がねらい通りに機能するかどうかについては、様々な観点から検討されるべきであろう。この点については、南風原(2017)が挙げた共通試験一般に求められる7つの要件が参考になる。それらは、①高品質の評価を実現すること、②コストを全体として抑えること、③何に向けて努力してほしいかのメッセージが明確であること、④難度の高い項目から低い項目まで満遍なく揃えること、⑤

十分な数の項目を用意すること、⑥多様な大学のニーズに最大公約数的に応えるものであること、⑦採点基準が明確で、迅速な採点が可能であること、からなる。

これらのうち、本研究では、「③何に向けて努力してほしいかのメッセージが明確であること」に着目する。南風原(2017)によれば、この側面は、測定論的な妥当性ではなく受験者の学習行動に関わるもので、「何に向けて努力すればよいのか」の認識が、高校生の学習の目標、動機づけに影響し、指導する教師にとっても重要であるとしている。したがって、新傾向の記述式問題に対する高校生や教師の認識を探ることは、今般の入試改革で期待されている高校教育への波及効果を知るための材料の一つにもなると考えられる。

以上の問題意識のもと、筆者らは、平成28, 29年度に、イメージ例やモデル問題例に対する高校生の認識を探るために、SD法(Semantic Differential method)による印象評価と解答に必要な資質・能力の判断を指標にして調査を行い、マーク式問題(大学入試センター試験)、旧来の記述式問題(個別学力試験)との異同を検討した。その際、比較対象として、数学についても同様に調べた(表1参照)。その結果、新傾向の記述式問題を高校生がどのように捉えているかの一端が明らかになりつつある(詳しくは、宮本ほか, 2017; 田中ほか, 2018; 宮本ほか, 2019)。

本研究では、対象を高校教員に広げ、高校生と同様の方法で、新傾向の記述式問題に対する認識を探った。

2 方法

2.1 調査対象

「平成29年度版 全国高等学校一覧」(全国高等学校長協会, 2017)を抽出台帳とし、無作為に2,000校を抽出した。

2.2 実施期間

調査は2018年2月～3月にかけて実施された。

2.3 調査内容

2.3.1 試験問題

評価対象となる試験問題は、高校生対象の調査で使用した試験問題をそのまま使用した。年度と教科から計4冊子あり、各冊子の試験問題は、①マーク式問題(大学入試センター試験)、②旧来の記述式問題(個別学力試験)、③新傾向の記述式問題の3題から構成された(表1)。

2.3.2 質問紙

試験問題を参照しながら回答する質問紙は、冊子の内容に応じて4種類作成した。質問内容は共通であり、次の通りであった。

①各問題に対する印象評価 高校生対象の調査で使用したSD法による評定尺度12項目を、教員向けに一部修正して使用した(表4参照)。例えば、「無意味な—有意義な」では、教員という立場からの視点を明確にするために、「生徒にとって」を付記した。問題ごとに、-2～+2の5段階で評定してもらった。

②各問題の解答に必要な資質・能力の判定 高校生対象の調査で使用した「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～(答申)」(中央教育審議会, 2014)と「高大接続改革の進捗状況について」(文部科学省, 2016)を参考に作成した22項目をそのまま使用した(表5参照)。

問題ごとに各資質・能力が必要かどうかを判定してもらった。

③回答者の属性及び個別学力試験の検討状況 勤務校の設置者と大学入試センター試験の受験状況、教員歴、校務分掌での進路指導部担当歴、個別学力試験の分析の実施状況と改善の必要性について尋ねた。

2.4 手続き

調査は郵送法で実施された。年度の同じ国語と数学の冊子及びそれらに対応した質問紙をワンセットとし、2セット作成した。調査対象校には、どちらかの年度のセットを無作為に割り当て送付し、各教科担当の教員1名ずつに回答するよう依頼した。その際、回答は任意とする旨の説明をアンケートの表紙に明記した。回答終了後は、同封した返送用封筒でアンケート用紙を返送してもらった。なお、本調査は、東北大学高度教養教育・学生支援機構研究倫理委員会の承認(2017年12月25日)を受けて実施した。

3 結果

3.1 サンプルの特徴

3.1.1 回収状況

H28版の国語は561名(回収率56.1%)、数学は577名(回収率57.7%)、H29版の国語は573名(回収率57.3%)、数学は598名(回収率59.8%)、総計2,309名(回収率57.7%)から回答が得られた。なお、教科で人数が異なるのは、学校によってはどちらか一方の教科しか返送されなかったためであった。

3.1.2 属性

①勤務校の状況 設置者については、全体では、国立1.2%、公立71.5%、私立26.9%、その他・無回答0.4%であった。この比率は、年度・教科別でも同様であった。なお、大学入試センター試験の受験状況の回答には多くの不備が見られたので分析から除

表1 各冊子の試験問題の出典と題材等

冊子	マーク(大学入試センター試験)	旧来の記述式(個別学力試験)	新傾向の記述式
H28国語	平成22年度本試験問題, 評論	平成23年度東北大学前期日程試験問題, 小説	「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】、問題イメージ<例1>
H29国語	平成22年度本試験問題, 小説	平成24年度東北大学前期日程試験問題, 評論	「大学入学共通テスト(仮称)」記述式問題のモデル問題例, モデル問題例1
H28数学	平成21年度追試験問題, 三角関数	平成14年度東北大学前期日程試験問題(文系), 三角関数	「大学入学希望者学力評価テスト(仮称)」で評価すべき能力と記述式問題イメージ例【たたき台】、問題イメージ<例4>
H29数学	H28と同じ	H28と同じ	「大学入学共通テスト(仮称)」記述式問題のモデル問題例, モデル問題例4

外した。

②回答者の教員歴 平均 18.4 年 ($SD=10.8$) であり、年度・教科別に見ても著しい差は見られなかった。

③進路指導部担当歴 全体では 78.9%が進路指導部を経験し、のべ年数は平均 6.9 年 ($SD=5.9$)であった。年度・教科別に見ても同様であった。

以上から、年度・教科によって教員としての基本的な属性の分布に著しい違いはないとみなせた。

3.1.3 個別学力試験に対する検討状況

表 2 は、年度・教科別に、個別学力試験の分析の実施状況を集計した結果である。年度・教科によって有意な偏りは認められなかった。年度・教科にかかわらず「必要に応じて解いている」が約 6 割を占めた。

表 3 は、個別学力試験の改善の必要性を集計した結果である。有意な偏りが見られ ($\chi^2(6)=63.57, p<.001$)、残差分析によれば、年度に関わらず国語では「ある程度改善が必要である」が有意に多く、一方、数学では「現状のままで良い」が有意に多かった。

3.2 印象評価の分析

3.2.1 因子構造

試験問題をすべて込みにして 2 相データに置き換え、因子分析 (主因子法) を行った。固有値の減衰状況から 3 因子が妥当と判断した。表 4 に示す通り、第 1 因子に負荷量の高い項目は、すべて「生徒」を付記して教員向けに修正した項目であった。教員の立場から生徒にとっての意義や有益性を評価する内容であることから「教育的価値」と命名した。第 2 因子は、教科の専門家としての目からみた問題のあり方を示唆する内容であることから「教科的品位」と

表 2 個別学力試験の分析の実施状況 (%)

	毎年自分で解いている	必要に応じて解いている	あまり分析していない
H28 国語	28.9	59.0	12.1
H28 数学	25.8	63.8	10.5
H29 国語	30.3	58.8	10.9
H29 数学	25.6	59.2	15.2

表 3 個別学力試験の改善の必要性 (%)

	現状のままでよい	ある程度改善が必要である	大いに改善が必要である
H28 国語	41.5	55.0	3.5
H28 数学	54.6	42.1	3.3
H29 国語	38.4	55.5	6.2
H29 数学	57.2	39.4	3.5

表 4 因子分析の結果 (プロマックス回転後のパターン行列と因子間相関)

	I	II	III
12 生徒にとって無意味な-生徒にとって有意義な	.896	.006	.093
10 生徒の役に立たない-生徒の役に立つ	.859	.016	.127
9 生徒に解かせたくない-生徒に解かせたい	.786	.089	.007
11 生徒の実力がわからない-生徒の実力がわかる	.732	-.021	-.065
8 生徒にはむりそうな-生徒にはできそうな	.515	-.125	-.234
1 つまらない-おもしろい	-.053	.823	.334
2 嫌いな-好きな	.007	.737	-.013
3 ふざけた-まじめな	.015	.468	-.236
7 下品な-上品な	.004	.452	-.161
5 典型的な-奇抜な	.028	-.206	.826
4 古い-新しい	.049	.189	.587
6 素直な-意地悪な	-.169	-.286	.478
因子間相関	I	—	.567
	II	—	-.023

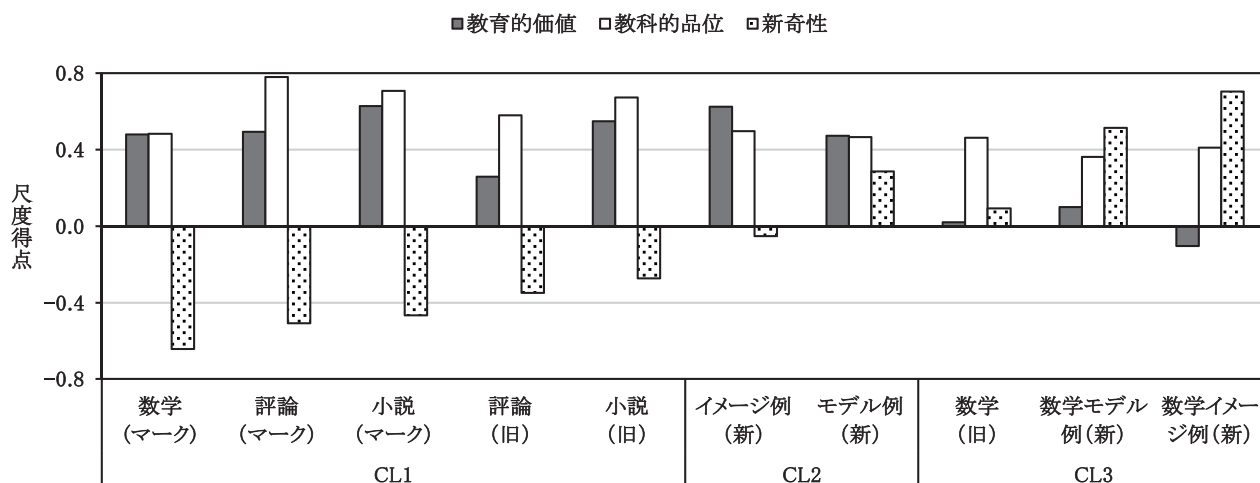


図 1 クラスタ別の各試験問題の尺度得点

表5 各資質・能力が試験問題の解答に必要と判定された割合 (%)

項目	小説 (マーク)	評論 (マーク)	小説 (旧)	評論 (旧)	モデル例 (新)	イメージ例 (新)	数学 (マーク)	数学 (旧)	数学モデル 例(新)	数学イメ ージ例(新)
1言葉の働きや役割に関する理解(言葉の働き)	79.9	80.2	59.1	72.8	48.9	45.9	23.8	28.4	59.6	62.4
2言葉の特徴や決まりに関する理解(言葉の特徴)	68.6	62.9	45.7	57.8	38.6	38.2	25.5	29.6	45.1	51.6
3言葉の使い方に関する理解(言葉の使い方)	75.2	65.9	64.3	64.0	55.3	53.9	17.0	25.0	48.6	56.3
4言語文化に関する理解(言語文化)	36.3	32.9	37.0	45.2	22.9	11.1	3.1	3.8	26.5	23.4
5一般常識や社会規範(一般常識)	31.6	54.5	23.6	44.0	77.5	70.0	5.3	3.0	30.3	39.3
6情報を様々な見方でよく調べ、まとめる力(情報集約)	5.6	16.4	13.8	29.7	85.3	84.3	28.3	33.7	63.7	72.3
7自分の文の構成や表現形式を振り返り評価する力(文章評価力)	8.2	10.2	63.2	64.9	65.6	72.0	4.3	28.4	32.0	46.6
8言葉や数式によって感じたり想像したりする力(感受性)	85.0	24.6	85.4	28.1	29.5	23.2	35.3	50.8	55.9	62.9
9イメージを言葉や数式にする力(イメージ表現)	37.3	10.9	77.1	40.8	52.2	45.9	28.4	42.0	64.8	79.4
10言葉や数式を通じて伝える力(伝達力)	18.2	15.7	73.9	68.1	77.7	79.1	14.1	50.3	50.6	64.8
11考えを形成し深める力(思考形成)	23.9	52.1	52.3	73.6	63.2	64.3	31.3	54.9	51.1	64.8
12自分の感情をコントロールして学びに向かう態度(感情統制力)	31.4	24.1	27.3	27.7	26.2	18.8	10.4	11.6	16.4	19.1
13歴史の中で創造され継承されてきた言語文化の担い手としての自覚(歴史)	12.2	14.1	13.0	26.0	14.7	4.1	2.0	2.1	6.9	5.9
14粘り強く、柔軟に考え考察を深めていく態度(粘り強さ)	25.7	56.6	42.9	66.3	56.0	52.1	42.6	61.4	61.1	71.1
15多様な考えを生かし、問題解決する態度(多様な考え)	11.2	21.1	17.0	25.3	67.7	58.6	29.4	40.2	53.1	60.8
16読解力	86.0	96.3	81.6	92.0	67.2	56.3	35.0	34.9	84.3	86.5
17要約力	22.7	49.6	57.5	85.5	68.4	59.6	7.8	18.0	39.2	44.5
18表現力	19.9	10.5	81.2	71.2	75.6	75.9	8.3	39.7	45.1	65.0
19コミュニケーション力(コミュニケーション)	17.8	5.9	26.4	10.8	45.0	37.0	1.6	5.2	11.7	12.1
20統計的思考力	2.3	5.5	1.8	10.8	49.4	84.3	4.6	5.8	12.9	10.1
21論理的思考力	31.1	83.2	37.0	83.8	66.3	70.2	55.5	73.3	62.5	74.4
22図やグラフを描いたり読んだりする力(図やグラフ)	0.7	1.6	0.5	2.4	59.0	89.5	71.8	61.0	66.5	76.6

注) 各項目のカッコ内は略称

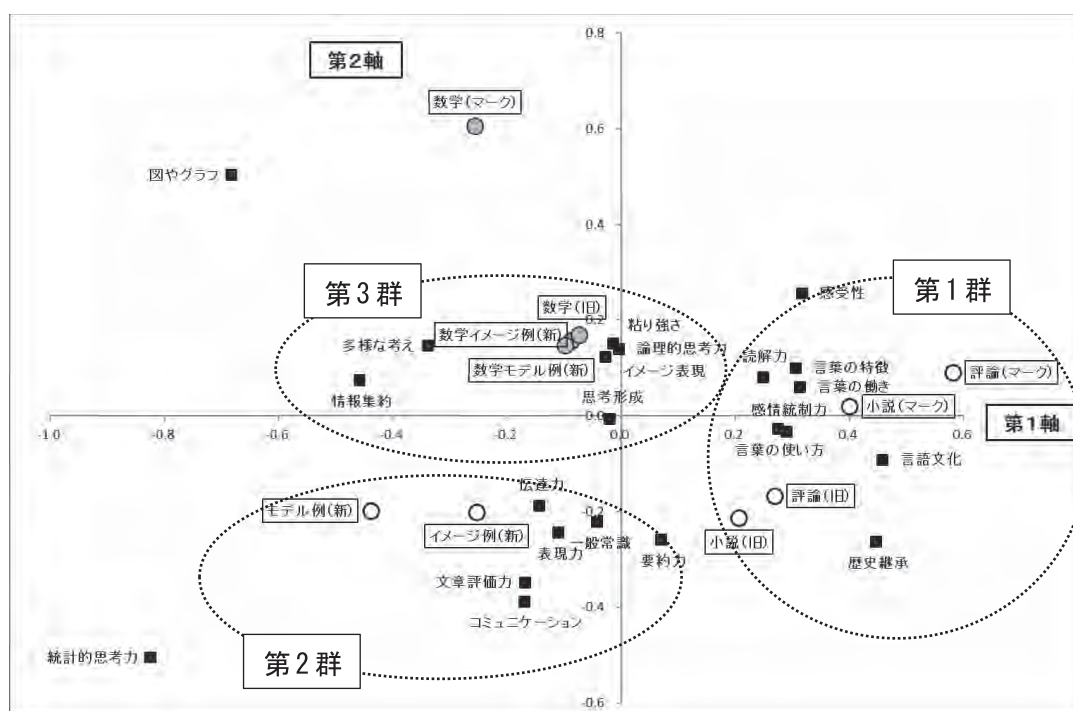


図2 資質・能力と各試験問題のマッピング

命名した。第 3 因子は、問題の目新しさや工夫に関する内容であることから「新奇性」と命名した。

3.2.2 印象評価の比較

各因子に負荷量の高い項目の評定値の平均を尺度得点とした。今回の調査で使用した試験問題ごとに 3 つの尺度得点 (平均) を求め、それらを使ってクラスター分析 (Ward 法) を行った。デンドログラムから、3 クラスター (以下、CL1, CL2, CL3) が妥当と判断された。図 1 は、クラスターごとに、各試験問題の尺度得点を示したものである。教科的品位はいずれのクラスターも同水準であった。CL1 は、すべてのマーク式と、国語の旧来の記述式が分類され、相対的に教育的価値が高く、新奇性は低かった。CL2 は、国語の新傾向の記述式からなり、教育的価値は CL1 と同等であるが、新奇性が CL1 よりも高かった。CL3 は数学の旧来の記述式及び新傾向の記述式が分類され、教育的価値は CL1, CL2 よりも低く、一方、新奇性は高かった。

3.3 解答に必要な「資質・能力」の分析

表 5 は、各資質・能力が、それぞれの試験問題の解答に必要なと判定された割合を示したものである。50%以上 (太字部分) に着目すると、国語、数学ともに、新傾向の記述式は、マーク式よりも、旧来の記述式と共通する資質・能力が多かった。また、両教科の新傾向どうしても共通する資質・能力が多かった。

さらに資質・能力と試験問題の関連を可視化して捉えるために、対応分析を行った。第 1 軸 (イナーシャ = 0.08814, 寄与率 48.0%) を横軸, 第 2 軸 (イナーシャ = 0.04496, 寄与率 24.5%) を縦軸にして、資質・能力と試験問題を布置した。図 2 に示す通り、大きく次の 3 つの群に分かれた。第 1 群は、国語のマーク式と旧来の記述式と、言葉の特徴、言葉の働き、言葉の使い方、読解力、感受性、感情統制力、言語文化、歴史敬称といった資質・能力が布置された。第 2 群は、国語の新傾向の記述式と、一般常識、要約力、文章評価力、表現力、伝達力、コミュニケーションといった資質・能力が布置された。第 3 群は、マーク式を除く数学の問題と、情報集約、多様な考え、イメージ表現、思考形成、論理的思考力、粘り強さといった資質・能力が布置された。

3.4 個別学力試験に対する意識と新傾向の国語記述式問題の評価の関連

国語問題の調査対象者を、個別学力試験の改善の

表 6 各群における新傾向の国語記述式問題の印象評価尺度得点の平均と標準偏差 (カッコ内)

試験問題	尺度	現状維持群	要改善群
イメージ例	教育的価値*	.54(.74)	.69(.65)
	教科的品位*	.42(.65)	.55(.64)
モデル問題例	教育的価値***	.32(.77)	.56(.75)
	教科的品位***	.31(.70)	.56(.67)
	新奇性***	.19(.64)	.35(.61)

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

表 7 各群における新傾向の国語記述式問題の解答に必要なと判定された資質・能力の割合 (%)

試験問題	尺度	現状維持群	要改善群
イメージ例	1 言葉の働き*	40.3	50.6
	5 一般常識**	62.8	75.3
	14 粘り強さ**	45.1	57.2
	17 要約力*	54.0	63.4
	18 表現力*	70.8	79.7
	22 図やグラフ*	85.4	91.9
モデル問題例	2 言葉の特徴*	45.0	34.5
	9 イメージ表現*	46.0	56.9
	10 伝達力*	73.0	80.8
	14 粘り強さ*	49.3	60.8
	15 多様な考え**	60.2	72.6

* $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

必要性に対する回答のうち「現状のままでよい」を現状維持群 (H28 は 227 名, H29 は 211 名), 「ある程度改善が必要である」「大いに改善が必要である」を要改善群 (H28 は 320 名, H29 は 339 名) とする 2 群に分け、新傾向の記述式問題 (H28 はイメージ例, H29 はモデル問題例) に対する印象評価と、解答に必要な資質・能力の判定を比較した。印象評価では t 検定を、資質・能力の判定では Fisher の直接法を行った。

表 6 は、印象評価において群間で有意差が見られた結果を示したものである。イメージ例では教育的価値と教科的品位で、モデル問題例ではすべての尺度で、要改善群の評価が現状維持群の評価よりも有意に高かった

表 7 は、解答に必要な資質・能力の判定において群間で有意差が見られた結果を示したものである。モデル問題例の「言葉の特徴」以外は、すべて要改善群の選択率が有意に高かった。

4 考察

本研究では、新傾向の国語記述式問題が伝えるメッ

セージ（何に向けて努力すればよいのか）の明確さを検討するために、同問題に対する高校教員の認識を探索した。

まず、SD法による印象評価では、3つの因子が見出された。そのうち、新奇性については新傾向の記述式は、マーク式及び旧来の記述式よりも高く評価されたが、他の2つの因子では同程度の評価であった。このことから、高校教員は、新傾向の記述式問題に対して目新しさを感じながらも、国語の試験問題として兼ね備えるべき価値・品位は損なわれてはいないと捉えていることが推測される。

一方、解答に必要とされる資質・能力については、新傾向の記述式は、マーク式や旧来の記述式とは異なって捉えられていた。高校教員は、新傾向の記述式の解答に必要な資質・能力として、とくに、一般常識、要約力、文章評価力、表現力、伝達力、コミュニケーション（力）（図2参照）を重視した。新傾向の記述式のねらいは「複数の情報を統合し構造化して新しい考えをまとめる能力やその過程や結果を表現する能力を適切に評価すること」であるが、前半の能力は文章評価力、要約力、後半の能力は表現力、伝達力、コミュニケーション（力）と関連すると考えられる。

こうした新傾向の記述式問題の印象評価や解答に必要な資質・能力の判断の傾向は、個別学力試験に対する改善の必要性が影響し、改善の必要性を感じている者ほど強まることも示唆された。

以上から、高校教員は、新傾向の記述式問題で試みられた新しい内容構成を肯定的に受け止めつつ、従来の問題とは異なる資質・能力が必要であると認識していることが示唆される。そして、必要と判断した資質・能力は、新傾向の記述式問題のねらいと部分的に整合していることから、高校教員には新傾向の記述式問題に込められた「何に向けて努力すればよいのか」のメッセージが一定程度伝わっていることがうかがえる。

もちろん、本研究で使用した指標だけで、高校教員のメッセージの読み取り状況を十分に汲み尽くせてはいない。今後は、別の指標を採用するとともに、メッセージの読み取りによって実際の指導行動がどう変化するかについて検証する必要がある。さらには、本研究で取り上げた側面だけでなく、南風原（2017）が挙げた共通試験一般に求められる他の要件についても検討すべきであろう。

謝辞

本研究は、大学入学者選抜改革推進委託事業「個別学力

試験『国語』が測定する資質・能力の分析・評価手法に関する研究」の平成29年度の取り組みに基づくものである。

引用文献

- 中央教育審議会（2014）「新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の一体的改革について～すべての若者が夢や目標を芽吹かせ、未来に花開かせるために～（答申）」文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/_icsFiles/afieldfile/2015/01/14/1354191.pdf（2019年8月28日）。
- 南風原朝和（2017）「共通試験に求められるものと新テスト構想」東北大学高度教養教育・学生支援機構編『大学入試における共通試験』東北大学出版会、83-99。
- 高大接続システム改革会議（2016）。「高大接続システム改革会議『最終報告』」文部科学省
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/_icsFiles/afieldfile/2016/06/02/1369232_01_2.pdf（2019年3月25日）。
- 宮本友弘・倉元直樹・田中光晴（2017）。「問題の出題形式と測定する資質・能力の関係に関するテスト理論・測定学に基づく分析」『日本テスト学会第15回大会発表論文抄録集』、130-133。
- 宮本友弘・田中光晴・庄司強（2019）。「新共通テスト（イメージ例）が測定する資質・能力の分析（2）—センター試験及び個別学力試験の遂行状況との比較から—」『大学入試研究ジャーナル』29, 99-104。
- 文部科学省（2016）。「高大接続改革の進捗状況について」文部科学省
http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/28/08/1376777.htm（2018年8月31日）。
- 田中光晴・宮本友弘・倉元直樹（2018）。「新共通テスト（イメージ例）が測定する資質・能力の分析—高校生対象のモニター調査から—」『大学入試研究ジャーナル』28, 1-6。
- 全国高等学校長協会編（2017）。「平成29年度版 全国高等学校一覽」学事出版。